# Dear Girls

8日は国連が定めた「国際女性デー」。朝日新聞は、次世代の女の子たちが、もっと自分らしく生きられる社会をめざす企画「Dear Girls」に取り組んでいます。

## これがわたし

自分らしいところはこんなところ。大人になる前の女の子に伝えたいことは――
国内外で暮らす女の子や女性たちから寄せられたメッセージです

東京都 秋元栞さん(12)

生き物が好き。飼い犬のテラは何でも私と同じことをしたがる。カメのかめきちはピアノを弾くと踊る。かたつむりはすぐ脱走。思った通りに生きている。私もやりたいことは何でもやってみる。限界は決めない。夢は獣医

兵庫県 横山杏優さん(16)

人見知りでいろいろなことに不器用。だけど決めたらとことんやる私。言葉をもらった。「Slow and steady wins the race!」(ゆっくり着実な者がレースを制す)私にぴったり。大事にしよう

東京都 菅野暁さん(10)

アプリ開発に夢中。「回一首(まわりっしゅ)」は、百人一首がテーマの自信作。去年アップル社のティム・クックCEOにプレゼンテーションしたら「面白い」って。将来は人工知能を作ったりロボットを動かしたりしたい

東京都 伊藤礼美さん(24)

いじめに苦しんだ中学時代、キャッチボールが心の支えでした。定時制高校の男女混合の野球部では主将に。今は女子野球チーム「紫しきぶう」でプレーし、3年連続で全国大会に出場。もっと強くなろうと仲間とがんばっています

埼玉県 斎藤千夏さん(12)

キャンプが大好きです。キャンプでは男女を意識しないし、外国の人や障害のある人もいます。「女だから」「男だから」ということは考えず、火おこしも料理も遊びも、やりたい人や得意な人がやっています

東京都 坂室富士子さん(12)

バレエを踊っている時の私が一番好き。思いっきりジャンプすると、モヤモヤした気分も吹き飛ぶから。中学生になったら、コンクールに挑戦する予定。落ち込むようなことがあっても、悔しさを勇気に変えて乗り越えたい

岩手県 山本千尋さん(24)

東日本大震災が起きた高3の春、友人に声をかけ、下着や衛生用品を集めて避難所の女の子たちに届けた。声を上げてみたら実現できた。避難所で働く看護師を見て、同じ道を志した。春から東京の病院で働きます

米ノースカロライナ 塩谷智美さん(19)

大学で政治経済や法律を学ぶ。神戸の女子校育ち。学級委員長、応援団長、演劇の男役……。ガールパワーを実感してきた。女性の活動範囲が、男女不平等な社会のせいで狭められないように。Rise up! 声をあげよう

千葉県 青木有澄さん(24)

人と違うことをするのが好き。20歳の時、成人式の代わりにインド留学し、目からうろこの毎日だった。卒業式を待たずに再びインドで、NGOのインターン。やらずに後悔よりやって後悔。それで、今のところ後悔はない

愛知県 栗金えみさん(37)

1歳の長男を保育園の事故で亡くした。国の検討会に加わり再発防止を訴えてきた。親戚に「女の子は学をつけても仕方ない」と言われてきた。でも活動の中で学校での学びは確実に助けになった。「女の子は～」に負けないで

米ニューヨーク 母袋有美さん(41)

世間が期待する女性像を演じていませんか。意見も生き様も多様であることがよしとされる米国と、世間とのずれを気にする日本。君の考えは読めないね、と言われるくらいがいい。2人の息子のシングルマザー。趣味はボクシング

大阪府 木村侑加さん(30)

ガールスカウトの活動で3年前、ジェンダーによる固定観念や人権を学び、「女の子なのに」と言われた時の違和感の理由に気づいた。国連の会議で体験を話すと多くの共感が。日常の「え?」という引っかかりをどうか大事に

本、特にファンタジーが好き。食事や戦闘シーンでその様子を想像していると、まるで自分が本の世界の住人になったような気持ちになれる。中学生になっても素晴らしい本とたくさん出会い、得られるものを大切にしていきたい

岩手県 藤野日花里さん(12)

川上未映子、桐谷健太、小池百合子、駒崎弘樹、西原理恵子、サヘル・ローズ、ジェーン・スー、辛酸なめ子、瀬戸内寂聴、伊達公子、野田聖子、春香クリスティーン、東小雪、ぺこ、安冨歩、山口智子(50音順、敬称略)

グラフィック 菊川明子

# 私は私よ　肯定感を持って

下村一喜氏撮影

黒柳 徹子さん

くろやなぎ・てつこ　1933年生まれ。女優、タレント、ユニセフ親善大使。76年放送開始の「徹子の部屋」(テレビ朝日系)は、同じ司会者による最多放送としてギネス世界記録に。インスタグラムのフォロワーは約50万人。

テレビ放送が始まった1953年、NHK専属のテレビ女優1期生になりました。とても自由な家庭と学校で育ちましたし、女優という仕事は女性にしかできないので、あまり「女だから」と制約を感じることなく生きてきました。

でも、25歳から30歳ごろは一番嫌だったわね。「そういうの知ってる」と言うと、「知ったかぶり」とか「生意気」とか言われる。「知らない」と言えば「かまとと」って言われる。30を過ぎたら言われなくなるだろうと思った。30歳になった時は「あは、せいせいする」って思いましたね。

40歳になる少し前、ニュースショーの司会を頼まれました。女性がやるのは初めて。スタッフは全員男性で、頭からものを言うような人もいた。「その次にこれをやるのは変だと思いますけど」と私が言ったりすると、「何でもいいからやりゃあいいんだよ」と言われたり。男の世界だなあと思いました。女の立場が弱いって、こういうことを言うんだなあ、「何でもいいからやりゃあいいんだよ」だなんて、そんなのってないんじゃない?って。

でもね。結局のところ自分は自分、人は人。私の人格もよく知らずにガンガン言う人は、ろくなもんじゃないと思って。私は私よ、勝手に言ってれば?って。

学校でも家庭でも、人格を大切にしてもらったおかげで、自分が何ができるかは分からないけど、何かできるだろうとずっと思ってきた。人は人って思えたのは、自己肯定感を育んでもらったからだと思います。

世界を広く見る、いろんなことに関心を持つ、よその国で悲しい事件があったら知ろうとする。そういうことも大切ね。何も、海外に出てボランティアをするってことじゃなくてもいいの。ちょっと知っておくってことだって、何か人に優しくできることにつながると思うの。

男の人に比べると、女の人は外見のことでいろいろ言われがち。嫌だと思う人もいるでしょうけれど、私はなるべくきれいでいようと思っています。男性のためというより、自分が楽しく生きるために必要なことだと思うから。

それから、政治家のことで一つ言いたいの。国会なんかで子どもの話が出ると「お前は産んだことないのに」とかって言う議員がいるでしょ。あれは、ほんっとに不愉快ね。「厚化粧の女が」とか。すごい女性蔑視がある。国会なんかで言うのだけはやめてほしい。「こういうこと言っていいんだ」という気分が社会にも広がってしまうから。

海外には女性の大臣なんて大勢いるけれど、日本は少ない。女性がもっとそういうポジションについて、変なこと言わせないようにしなきゃならないわね。

(聞き手・三島あずさ)